

論文と資料紹介

講演録

国士館の母体「大民団」の活動

国士館大学文学部教授・国士館史資料室室長

佐々 博雄



※本稿は、若林町会主催および世田谷区立世田谷図書館の共催で、二〇一八（平成三〇）年一〇月二八日に行われた第一〇回若林歴史講演会での講演（「大民団と国士館」）をもとに、加筆・修正したものである（於国士館大学世田谷キャンパスメイプルセンチュリーホール一階大教室）。



佐々博雄文学部教授

只今、ご紹介にあずかりました国士館大学の佐々と申します。

先の講演で松本剣志郎先生がいわれたように、この若林歴史講演会は一〇年を迎えられましたが、このうち第六回からこの五年間、国士館大学を会場に、私も講演をさせていただいております。また、本日は第二七回の「萩・世田谷幕末維新祭り」が行われておりますけれども、実は、この若林歴史講演会がはじまる以前、平成一七（二〇〇五）年一〇月の幕末維新祭りの際に、松陰神社の模造松下村塾の前でお話をしたのが、最初の関わりになります。

三年前（平成二七年一〇月）の若林歴史講演会は、大学の構内にあります大講堂内で行いまして、ちょうど寒い日で皆さんに急遽使い捨てカイロなどを配った記憶が

ありますけれども、実はその大講堂が、昨年の一〇月二七日に国の登録有形文化財（建造物）に登録されました。ちょうど、登録となった二七日は、国士館が創立一〇〇年を迎えるの記念行事の初日であったので、おかげをもちまして、良い節目を迎えることができました。

また、明日から一週間、大講堂では歴史展示を開催して、一般公開をするということにしておりまして、一部の期間は都の「東京文化財ウィーク」に参加することとしております。登録有形文化財になった本学の大講堂というのは、ご覧になっている方もいらっしやると思います。ですが、寺院風のちよつと変わった造りをしております。ただ、建築学の視点からいいますと、一〇八畳敷の大空間を確保するために三角形のトラス構造、いわゆる西洋の新しい工法を取り入れていて、古来の寺院造りの伝統的な建築方法とは違ったものが採用されています。そのような建築学的な意義もあって、昨年、登録有形文化財になりました。この講演の後、お時間がある方は、大講堂に足を運んでいただいで見学していただければと思います。

さて、国士館は、創立した麻布区筈町、現在の港区南青山七丁目あたりに該当しますが、大正八（一九一九）年にそこから世田谷に移転して、今年で九九年が経ちま

した。今年、国士館は創立一〇一周年ですが、来年は世田谷に移って一〇〇年目となります。

今日は、「国士館がなぜ生まれたのか」ということを中心にしたいと思ひまして、国士館の母体「大民団」についてお話ししたいと思ひしております。この大民団が無ければ、国士館もできず、また国士館がこの世田谷に移ってくることも無かった、ということをおまえて、お話を進めていきたいと思ひます。

大民団の発足

まず、簡単に「大民団」とは何なのか。ひと言でいいますと社会教化啓蒙団体です。大正初期の世相を憂える若者が、社会に対する啓蒙・教化を目的として結成したものです。

元々、東京に集まっていた学生たちで結成された「思いやり会」という集団が、この大民団の母体となつていまして、後に国士館の創立者となる柴田徳次郎もこの会に入っていたわけですね。柴田徳次郎は、福岡の出身で、上京して早稲田に在学していましたので、この会は、早稲田の柔道部や剣道部、あるいは雄弁部に所属する学生や卒業生の集団でした。また、当時、東京府下の福岡出

身の若者たちが集う「筑前学生会」という団体があって、この会も大民団の母体になっています。

その「大民団」ができたのは、大正二（一九一三）年四月三日、当時は「神武天皇祭」という祝祭日でありましたけれども、大正初めという時期は、明治三八（一九〇五）年に日露戦争が終わって、国家財政が非常に窮乏する一方で、重化学工業化など、いわゆる資本主義が発展していくという時期です。そういうなかで、東京府下には工場がつくられ、そこに地方から多くの労働者が集まってくるようになります。

一方、軍事の面では、明治四三年の韓国併合の後には陸軍に二個師団増設問題が起こり、国内政治の面では、これまで行われてきた西園寺公望と桂太郎の交代で政権を執った「桂園内閣」が行き詰まってきました。最終的に、いわゆる天皇の側近である内大臣になっていた桂が、また再び内閣総理大臣になるということで、天皇の政治利用に対する批判が出て、国民の間から反対運動が起こってくる。いわゆる「閥族打破」、「憲政擁護」をスローガンとして掲げた「第一次護憲運動」が起こってきたわけです。

まさにそういう運動が起こって、大正二年二月に第三次桂内閣は倒れるということになるわけですが、その二

カ月後に、都下の青年たちが大民団というものを結成することにになりました。正式には「青年大民団」といいますが、後に「大民倶楽部」や「大民社」と組織や名称が変わっていきまして、最終的には「大民倶楽部」という組織になっていきますが、ここでは「大民団」といっておきましょう。

それでは、「この大民団とはどういうものなのか」となるわけですが、青年大民団創設の「主旨」が、大正五年六月の機関紙『大民』創刊号に載っておりまして、当時の国内状況が反映されています。急激に進む都市化の一方で、労働者などが困窮してスラム街ができるというような、まさに混沌とした状況が背景にあるということ、その文脈から読み取れます。青年大民団主旨には「虚偽軽薄に流れ、剛健質実の気風は全然跡を絶ち、殊に似非文明の思潮は益々險悪に、固有の民生は方に地を払はんとす」とあり、また「是れ吾人青年が国家の柱石となり、勇往邁進せざる可からざる所以なり」などと記しています。当時の国内状況のなかで、いわゆる「物質文明」に相対して「精神文明」の重視ということをいっているのですが、「似非文明の思潮」を改良するといった主張をするわけです。またこれは、彼ら青年の務めであるということも明言しています。彼らがスローガンとしたも

のは「興国救人」、「社会改良」、「青年指導」という三つで、まさに当時の混沌とした時勢のなかで、自分たちが指導者として国家を背負っていくんだということ挙げていたわけですね。

さて、「結成された大民団がどんな活動をしたか」ということですが、大正五年六月に機関誌である雑誌『大民』が創刊されます。おそらく正式な活動というのは、大正五年五月に行ったこの『大民』の発刊披露会が最初なのですが、この後、ひと月おいて雑誌の創刊号が出されることとなります。披露会から雑誌発刊の一カ月の間に、それまで大民団を主導してきた早稲田の柔道教師であった宮川一貫を中心としたグループと、大民団のなかでは「頑固倶楽部」といわれた柴田徳次郎たちの若手グループの間で覇権・主導権争いがありまして、柴田に近い人物が宮川の弟を刀で斬るといふようなことがあって、『東京朝日新聞』の記事になっています。この間に、おそらく意見の食い違いがあって、宮川が大民団の中心から外れることになり、柴田たちの若手グループが中心になって、六月に雑誌第一号を出すというような活動をしていきます。この『大民』創刊号の表紙には、富士山または阿蘇山といわれておりますが、まさに山が火を噴いている火山の絵が描いてありまして、その脇には「吾

人の片言は、興国救人の神韻なり」という言葉が添えられ、またローマ字で「The tamin」と書いてあります。その後の雑誌の表紙には「damin」と表記が変わったりしますのでも、こゝでは一応「damin」といっておきましょう。

この時期は、現在の港区南青山七丁目あたりになりますが、麻布区の筈町という場所に大民団の事務所を構えておりました。資料では、この事務所は高木正得子爵の持家で、いまの三笠宮妃の百合子妃殿下がその高木子爵家から嫁がれているのですが、この高木子爵家の家を借りて事務所にしていたようです。そしてこの事務所のなかに、大正六年一月四日、私塾国士館が創立することになるわけです。

それから、大民団のなかには「頑固倶楽部」という会がありまして、いわゆる英気を養うために若者が集って弁論活動をやっています。当時、自己主張をする手段として弁論が非常に盛んで、東京でも多くの雄弁会というものがつくられます。代表的なものは、現在の講談社となる「大日本雄弁会」が明治四二年に結成されて、雑誌『雄弁』が発行されています。頑固倶楽部の集まりでは、弁論をやってお互いに自己主張をし、また彼らは集まるととにかく相撲をやるのですが、自らの身体を鍛えると

いうことが行われます。この会では、一〇銭という会費を取って、豚飯なり鶏飯なりをつくって一緒に食べ、時には多摩川など近郊に出かけて自然に触れて、相撲を取り、英気を養うことをやっていた。

その後、大民団は大正七年一月、松陰神社で吉田松陰や橋本左内といった幕末維新期の志士を顕彰する「国士祭」という祭りを実施します。これを契機に、大正八年一月に国士館は世田谷に移転して、現在の大講堂を中心として道場あるいは寮、それから教師が住む家を建て、ひとつの「町」のようなものをつくっています。そこには、世田谷の移転に際して、大民団が世田谷田園都市構想というようなものを持っていたことが反映されています。

後で話しますが、国士館ができたことよって、大民団の経営する組織体は「国士館」と「大民倶楽部」の二つとなって、それぞれが独立した組織として続いていくわけですけれども、基本的には国士館と大民団は表裏一体の関係にありました。昭和二年二月に発行された『大民倶楽部とは何ぞや』という資料には、「大民倶楽部と国士館は、恰も鳥の両翼の如きもので、どうしても分離して見ることの出来ぬものである」とあり、大民倶楽部は「国士館の精神を以って社会的民衆的に活動し、国士

館は大民倶楽部の精神を以って、専ら教育事業に当って居る」とあります。要するに、教育事業は国士館、社会事業は大民団といったような関係性にあり、大民団と国士館は精神一体になっているというわけです。

国士館の創立と世田谷

それでは、「なぜ教育機関としての国士館が生まれたのか」ということになりますが、大民団が教育事業を行うきっかけとなった「早稲田騒動」という事象があります。

早稲田騒動は、大正六（一九一七）年九月に、早稲田大学の初代学長であった高田早苗と二代目学長の天野為之との間で起こった学長選出をめぐる争いです。この対立の過程で学内の改革運動が起こったわけです。そもそも前年には、早稲田の創立者である大隈重信夫人の銅像建設をめぐる問題が起こっていて、これもひとつのきっかけとなっていました。この年の十一月に国士館が生まれることになりましたので、創立の数カ月前に早稲田騒動が勃発したわけです。

まさにこの国士館が創立する頃というのは、「大正新教育」が隆盛する時期で、羽仁もと子の自由学園や小原

国芳の玉川学園など、私塾から起こって学校が発展していくような動きがあります。あるいは白樺派の武者小路実篤が開いた「新しき村」の活動などもそうです。国士館は、実篤とは対極にあるかもしれませんが、生徒の自立や自給自足の活動を尊重した国士館も、これらの大きな教育の流れのなかに位置付けることができる。

そのきっかけとなったのが、実はこの早稲田騒動でした。早稲田でも新しい教育改革というものが進んでいて、推進派の若手の教授たちがいたわけですが、彼らが天野為之を支えようとする動きをしたわけですね。そこに「早稲田革新団」として加わったのが、柴田徳次郎、花田大助、中野正剛らの大民同人たちで、いろいろな集会をやっています。現役の学生では、後に『人生劇場』という小説を書く尾崎士郎がいて、彼も退学になるわけですが、ともかく大民同人は天野派を支持した。結局、天野は辞任して、商学部教授であった平沼騏一郎の兄の平沼淑朗が新しい学長になったことで、天野派は負けたわけですね。

そうしますと、天野派を支えていた教授の永井柳太郎、あるいは伊藤重治郎、後に東南アジアで活躍する原口竹次郎などは、新進気鋭の早稲田大学の教授であったわけですが、彼らは早稲田騒動で辞職をする。先日の『毎日

新聞』の記事に出ていましたが、永井は、後に衆議院議員になって、原敬の施政方針演説に対して痛烈な批判をするなど、政界でも活躍することになります。

実は彼らが、大正六年一月四日にできた国士館で教えることになるわけですね。国士館ができる前の大民団では、いろいろな方の講演会などもやっていたわけですが、これらの教授が早稲田大学を辞めることになって、大民団では国士館をつくって、彼らに教鞭を執ってもらうことで、本格的な教育に取り組むようになった。

このため、同じ麻布区筈町一八二番地の場所に、大民団事務所と私塾国士館が同居していたわけです。それは、どれくらいの広さかというと、そんなに広いところでもないですね。一階は八畳と六畳、四畳半の部屋があつて、二階は六畳、それから玄関といった普通の民家です。国士館の講義は、一階の八畳と六畳の襖を外した二間を使って、いわゆる「寺子屋」式といえますか、先生は学生と一緒に膝をつきあわせて学問をするという形式でした。そのなかで、東京府下の学生たちが、次第に国士館に集まってくる。授業のひとつは語学で、英語あるいはドイツ語を教えた。英語は、中野正剛の家庭教師でもあつたマチルド・カトウという英語教師が教える。学生は、他の大学にも通っているので、その授業が終わっ

た後ですから、国士館の授業は、夕方六時ぐらいから九時ぐらいまで行う。こうして、次第に人数が増えていくわけです。増えますと、手狭になるということで、大正七年頃には国士館移転ということを考える。こうして大民団は、いろいろな移転先を探すことになっていきます。

ひとつの候補が吉祥寺。現在は成蹊大学が建っているところなのですが、後に、柴田徳次郎が「ここを買っておけばよかったな」、「ここにつくればよかったな」といったくらいで、およそ三万坪の広い土地に移るといような計画があった。このため、頭山満、田尻稻次郎、野田卯太郎の名前で募金を行います。田尻は、専修大学の創立メンバーのひとりですが、当時は東京市長。野田卯太郎は、逓信大臣や商工大臣を務めた人物。そういう大臣クラスの人間が動いて、あちこちで寄付を募るといこともやっていた。

国士館の移転計画が持ち上がったのは、松陰没後五〇年から六〇年にあたる時期になりますが、大正七年一月、先程もいいましたが大民団は、吉田松陰と橋本左内を祀る「国士祭」を松陰神社の境内で行った。松陰が亡くなったのは一〇月二七日ですが、これを西暦にしますと一一月二一日なのです。おそらくは、命日にあわせて国士祭をやったのでないかと思うのですが、はっきりし

ません。この時に、松陰神社の神職から、国士を顕彰するような人々だからということ、隣接地に教育にちょうど良い場所がある、という話が出た。大民同人としても、国士館の移転先にふさわしいということで、吉祥寺の土地をやめて、すぐに世田谷に移転を決めた。

当時の教育というのは、いわゆる「科学知」と申しませけれども、そういう「知識」だけを教えていくわけではなく、混沌とした時代ですから、それではダメなんだというの、彼ら大民同人の考えでした。その一方で「精神文明」といい方をしておりますが、精神の修養が非常に重要だと考えるわけです。大正の青年に対するキーワードとして、「成功」、「煩悶」、「修養」というような言葉がよくいわれます。彼らのような若者には、「大正」という資本主義の時代のなかで、自分たちを精神的に修養していくのだという考え方があつた。この修養をすすめるうえで、場所というのは非常に大事であると考えていた。このため、吉祥寺よりは、豪徳寺があり松陰神社がある、この世田谷の地が適当なのだ、ということになりました。また、現在は世田谷区役所の駐車場の場所にあたりますが、当時は玉木家の屋敷があり、その敷地のなかに乃木神社があつた。江戸時代の代官家の系譜である大場信續の家も、当時はそのあたりにあつた。だから、「こ

んなに素晴らしいところはない」ということで、世田谷の地に移転が決まった。

さて、大民団に話を戻しまして、国士館が世田谷に移る前後にあたる大正七年の「青年大民団清規」、それから大正九年の「大民団清規」から、「大民団と国士館との関係はどうなったか」を考えてみたいと思います。

国士館が世田谷に移る前の大正七年「青年大民団清規」には、大民団の事業というかたちで「其の目的を達成するに当たり先づ『青年立国』『社会改良』の二大標識の下に必要にして充分なる各般の事業を経営す」ということがあります。そして「育英養材」として大民団が「国士館を経営す」、それから「共済互恵」として「諸種の社会事業を経営す」、「文化治及」として「雑誌『大民』を刊行し又各種の出版講演会等を催す」、「清興善遊」として「国風による体技娯楽を催す」とあります。「国風」というのは、相撲などが、まさにそうなのでしょうね。

次に、国士館が世田谷に移ってからの大正九年の「大民団清規」によれば、そこでは大民団が何を経営しているかというところ、「育英養材」として「『国士館』を経営す」とあり、もうひとつに「文化指導」として「『大民俱樂部』を経営す」とある。それからこれは、後に独立する形になりますけれども、大民団のなかで「共済互恵」で「マハ

ヤナ学園を経営す」とある。この「マハヤナ学園」は、現在の大乗淑徳学園の前身にあたっていて、これを起こしたのが長谷川良信という人物ですね。長谷川は「冬民」という号も使います。大民団は「社会事業」ということをいっておりますが、当時、千住周辺にいろいろな工場ができる、地方から多くの労働者が集まるわけで、病気になる、孤児が発生したり、子供が増えたり、貧困に起因したいろいろな問題が出てくる。実は、東京では、国士館にも関わりのある渋沢栄一が初代院長を務めた「東京市養育院」といった社会救済をするための施設があった。それを、長谷川がさらに発展させて、大正八年の四月に西巢鴨のスラム街にマハヤナ学園というものをつくったのです。

大民団の組織と構成

次に「大民団の組織はどういう風になっているのか」、「どんな人物がいるのか」ということに触れたいと思います。

ちょうど大民団が結成されて活動をはじめた頃である、大正六（一九一七）年の「青年大民団」名簿があります。これをみますと「顧問」に田尻稻次郎、頭山満、

野田卯太郎がいます。先程も触れましたが、田尻は、子爵・法学博士で東京市長、専修大学創立者のひとりです。それから頭山は、福岡の出身で士族結社である玄洋社を結成した人物です。この時期は、頭山は表立った政治活動はほとんどやっておりませんが、彼と同世代の仲間たちはほとんど死んでしまつて、彼だけカリスマ的な存在となつていました。それから野田も福岡の出身ですが、衆議院議員として逓信大臣や商工大臣を歴任してきます。

それから「本部員」としては、「編集」に小説家としても有名な薄田漸雲。「主筆」に花田大助。花田は、先程いった早稲田革新新団のひとりで、尾崎士郎らと一緒に早稲田劇場で演説をした人物。「理事」に白石好夫や簡牛凡夫。先程お話ししましたが宮川一貫の弟を斬つたという簡牛凡夫は、後に自由協会というものをつくつて普選運動をやりました。戦前は農本主義・社会主義系の活動家で、戦後は自由民主党に入つて大蔵政務次官を務めた福岡出身の人物です。白石好夫は、頭山がインドの独立運動家であるボースらを匿うために、頭山家から白石たちが密かに連れ出して、中村屋に匿つたという柔道の達人です。「中村屋のボース」こと、ラス・ビハリ・ボースは、国士館で教えておりますし、大民同人でもあつた。

「主幹」が柴田徳次郎、「経理」が喜多悌一というようなまさに後の国士館の核になるような人物が、ここに挙がつているわけです。

「名誉理事」のなかには、東京市養育院の長谷川良信、剣道の達人である明信館の齋村五郎、それから後に国民同盟で活躍する政教社の中野正剛あたりも入つている。また「名誉理事」は各地におりまして、満鉄本社には上塚司がいます。上塚は、後に『高橋是清伝』を書きまして、また衆議院議員も務めています。熊本には、松野鶴平というのがみえますが、松野頼三のお父さんですね。野田卯太郎の娘婿が鶴平ですから、縁戚の関係にあつた。九州が比較的多いのですが、中国や朝鮮、アメリカやフランスにもいて、全世界といえますか、各地に散らばつて名誉理事がいました。

次に、大正一年の「大民倶楽部」名簿をみますが、国士館は国士館として、大民団は大民倶楽部として、それぞれ独立するというかたちで出てきます。

大民倶楽部の「理事長」は台湾銀行の山崎源二郎。「理事」には、国士館の関係者の花田大助や山田悌一がいます。山田は、先ほどの喜多悌一のことです。養子に行きまして「山田」姓が変わっています。それから「評議員」は上塚司や濱地八郎、柴田徳次郎、渡邊海旭。渡邊海旭

は、長谷川良信の恩師にあたる人物で、芝中学校の校長をやっている、宗教大学（現在の大正大学）でも教えている。それから、いわゆる「中村屋のボース」、ラス・ビハリ・ボースや頭山満の息子の頭山立助、早稲田騒動で追われた永井柳太郎、中野正剛という人物が評議員になっっています。続いて「賛助員」、「部員」というのが、三〇〇人近く所属していたわけですね。

続いて昭和六（一九三一）年の「大民倶楽部」名簿をみてみましょう。「顧問」には、頭山満、徳富猪一郎（蘇峰）、それから元外務大臣の内田康哉、元文部大臣の水野錬太郎、渡邊海旭などが就いています。「理事」のメンバーのなかには、国士館から柴田徳次郎、眞藤義丸、山田悌一などが入っている。そして「評議員」をみますと、上塚司、長谷川良信、永井柳太郎、大場信續などがいます。ここでちょっと注目しなければいけないのは、世田谷地域との関係です。大正一二年の関東大震災の際、すでに世田谷にあった国士館は、地域住民の避難所として活動した。それが縁になって世田谷の代官家の末裔にあたる大場信續が、国士館に関わり、また大民倶楽部にも関わるということになります。その震災後の大正一五年に国士館商業学校が創設されて、校長に大場信續が就いた。この国士館商業学校は、世田谷の六カ町村の経営

で、国士館中学校の校舎を使って夜学として開校した。このように地域との関わりができたので、評議員のなかにも大場をはじめ、地域の方々の名前がみられるようになります。

さて、結成当初の大民団員を、いくつかのグループに分けてみると、おおよそ四つのグループに分かれます。

第一に「顧問」の長老グループで、頭山たちがいます。第二に、柴田、花田のような早稲田大学や福岡出身生のグループで、これが中核ですね。花田は、岡山県出身で福岡出身でありませんが早稲田大学の卒業生です。また二松学舎とか、現在の拓殖大学である東洋協会、東京府下の学生・卒業生も、このなかに入ってきます。

第三に満鉄・大陸グループで、上塚司、山田悌一などがいます。実は山田は、大陸でいわゆる第一次・第二次満蒙独立運動に関わっており、運動の失敗後に大陸から戻ってきて国士館に加わることになりました。青年大民団が機関紙『大民』を創刊する頃は、第一次世界大戦がはじまって日独間で青島戦争が行われますが、その軍事物資等の払下げをもらって、大民団の資金源にしたという話もある。満鉄グループの上塚司などは、資金的、経済的な面で大民団を支援した。

そして第四は、仏教社会事業グループです。長谷川良

信は、当時、「宗教」、「社会事業」、「教育」の、まさに三位一体論を提唱している。また、自分の先生筋にあたる渡邊海旭にもこれをすすめて、海旭も大民団のメンバーになり、国士館にも関わっていく。

これらの大民団員の各グループの性格をみていけば、当時の世相や国士館の成り立ちも知ることもできるわけです。まず、顧問グループというのは、幕末に生まれ明治維新期に思春期を過ごして、明治の民権運動、あるいは対外強硬運動というような、いろいろな形で時代に関わってきた人物らが長老として顧問を務めている。自分たちが若い頃にこういう世界をつくろうと思っていたのに、当時の世相といえますか、進んできた現実とは、何かが違うという思いを抱いているわけですね。そして大正になって大民団の青年たちを知り、彼らを支援しようというグループです。それから渡邊海旭とか長谷川良信らが実行していた仏教社会事業グループ。まさにボランティアといえますか。最近、国士館は、ボランティア活動を若林町会と提携してやっておりますが、まさに社会事業の先駆けといったところですね。先ほどいった長谷川が最初に勤務した東京市養育院巣鴨分院、この東京市養育院事業を明治になって支援したのが渋沢栄一ですが、大正になって貧困層の救済活動を進めるようなグ

ループがあった。この後、渋沢は国士館維持委員として運営に協力することになりますが、長谷川たちの活動もその一因になったと考えられます。このように、大民団は、さまざまな立場から当時の世相を憂えて集まった人々の団体であったといえるでしょう。

大民団の活動と国士館

さて、それでは「大民団の活動は具体的にどんなものだったのか」ということになりますが、特に、国士館が世田谷に移転してからの大民団の活動というのは、国士館とは別の、または国士館と一緒に、多様な動きをみせていきます。

まず、国士館の施設を使って、一般向けに夏季講習会が開催されています。世田谷が清涼な地であるということで、国士館の講堂や寮、それから教員を使って、生徒の授業の無い夏季休暇中に講習会を開く。また、国士館が主催の夏季講習会とは別に「労使協調」を主張していた渋沢たちが、国士館の施設を使って、労働者講習会というのをやっています。主催は『向上』という雑誌を出している修養団（協調会）です。

また、普通選挙運動の活動があります。全国的な普選

運動は大正八（一九一九）年から九年にかけて高揚しますが、大民団が動きだしたのは大正六年のことで、比較的早い時期に選挙権拡張論を唱えています。大民団の当初の主張は「二〇歳以上の日本男子は悉く選挙権を持つこと」というものです。大正一四年に公布された普選法の有権者は「二五歳以上の男子」でしたけれども、大民団は「二〇歳以上」という主張をした。この時、大民団は、全国の著名人にいろいろな意見を聞いているのですが、早稲田大学教授の安部磯雄は「二〇歳以上の男女に選挙権を与えるべきだ」と回答していて、まさに戦後の選挙権と同じことを、大正六年に主張しているわけです。結局、この時は普通選挙は実現しないわけですが、こういう運動を行っている。

それから、仏教関係でも、全宗派の代表者を集めて海外布教団をつくるべきだということで、会合を開いたりしています。また、全国に大民団の支部がありましたので、特に、宮崎県の都城とか、熊本支部では、盛んな活動が行われたりしています。

また、大正八年には、国士館が世田谷に移るわけですが、同年一〇月に、大民団では、国士館の「附帯事業」をやる主張します。事業は六項目の構想が挙げられているのですが、第一に、国士館の建物のうち学生の寮だ

けでは無くて、洋風で別荘のような教職員用の「教士館」をつくらうとしています。第二に印刷事業。大民団の事業として、国士館の学生たちの手で印刷をやる。第三には中学校をつくる。また第四には、国士館への交通機関網をつくらうと主張する。当時、渋谷から三軒茶屋には玉電（玉川電気鉄道）が通っていましたが、その先の三軒茶屋から世田谷、下高井戸の世田谷線開通は、大正一四年になってからです。それより先の大正一一年には、三軒茶屋から松陰神社前の道路にバスが通るようになって、だいたい二一銭の運賃だったようです。実際には、関東大震災の後になって、国士館の周辺にも交通機関が整備されることになりましたが、そういった主張も行っています。

それから第五に「理想田園都市」計画を挙げています。国士館の周辺にある松陰神社、乃木神社、豪徳寺一帯を、田園都市にしようという構想です。最後の第六には、国士館のなかに購買組合組織をつくらうとしています。国士館が世田谷に移ってから、学内には「国士村」というのができて、学生のなかから村長を決めて、教員も学生も農作物を栽培して自給自足的な生活をするといった制度がありました。「自由村」といいますか、国士館を中心として実質的な「村」をつくるというような構想です。

当時の風潮にあるようなことですが、学内で採れた作物などを、購買部をつくって近隣の方々にも提供しようとした。

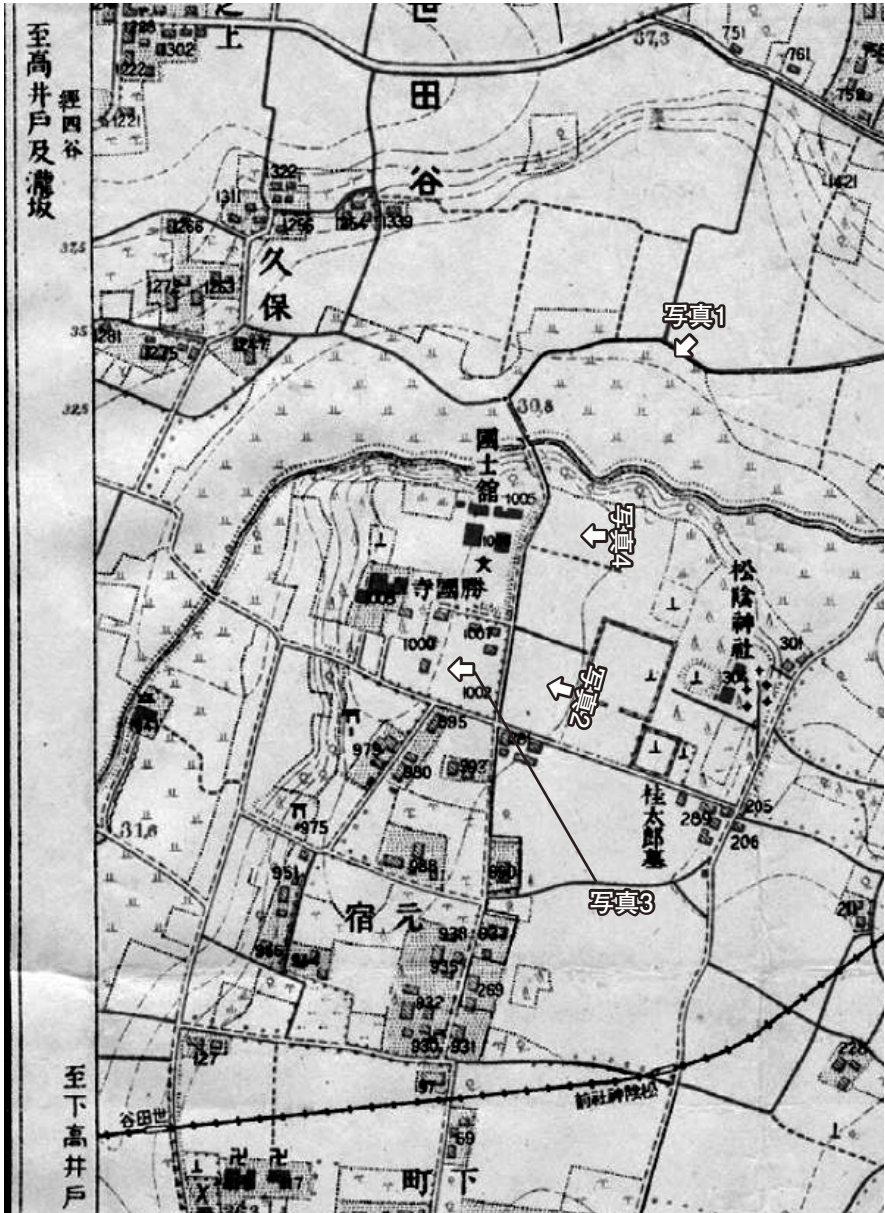
レジュメの最後に、大正一五年の地図と写真を載せておきました。【地図】には、写真が撮られた位置と方向を、地図上に示しています。【写真1】は、梅ヶ丘側から撮っていて、写真の丘の上に屋根がみえているのは国士館の大講堂です。まあ、大正八年の国士館周辺は、何にもないところであつたわけです。【写真2】は、今の若林公園あたりから撮ったもので、中央のいくつかの小さな家が「館宅」といわれる教師用の建物です。【写真3】は、その館宅です。【写真4】が、大正一五年にできた中学校の校舎で、夜は商業学校として使っていました。

こういった何もなかった世田谷に、ちよつと「ハイカラ」といいますか、国士館が建物を建てて、この周辺地域を「田園都市」にしようという一大構想があつたわけですね。イギリスで起こつた田園都市構想というのが、明治四〇（一九〇七）年に日本に入ってきました。関西では阪急・小林一三の住宅開発、東京では東急・五島慶太の田園調布開発といったように、計画都市が郊外につくられていきます。これが大正一二年の関東大震災の後に急激に広がっていくことになりましたが、当時、

大民団や国士館の構想としても同様の計画があつたわけです。

さて、「国士館がなぜ生まれたのか」ということを中心に、その母体である「大民団」の活動を中心にお話を進めてきました。この大民団が生まれる背景には、当時の社会状況があつて、また大民団と国士館は表裏一体の関係であり、そして大民団のメンバーは大きく四つのグループから成り立っていること、などをお話してきました。この大民団の活動が中心となつて、当時の社会的な背景のなかで、あるいは教育の動向のなかから、この国士館が生まれたわけです。

国士館は、当時のさまざまな社会状況に危機感を抱いた、熱き思いを持つ青年たちによって創立するわけですが、明治維新から邁進してきた「物質」中心の日本の近代化に疑問を持った長老たちが、若き彼らを支援して、新しい教育を模索して生み出された教育機関であつたといえます。また、国士館の理念は、経済を、または法律を専門に教えるという教育では無く、いわゆる当時起こつた「私塾」教育という流れのなかに位置付けることができます。自由学園あるいは玉川学園というような、あるいは「新しき村」というような、新しい教育の動きのなかで「私塾」としての国士館が生まれた。その元に



大正 15 年 6 月 世田谷 1 万分の 1 地形図 (明治 42 年測量・大正 14 年部分修正)
(大正 15 年 6 月 30 日発行、大日本帝国陸地測量部) 部分
(『東京 1 万分 1 地形図集成』柏書房、1983 年 11 月)



写真2 大正10年頃
東南から国土館を望む



写真1 大正8年頃
北東から国土館を望む



写真4 大正15年頃
国土館中学校・商業学校校舎（東側）



写真3 大正15年頃
国土館館宅（校内南側）

は、大民団というものがある。その一端をご理解
いただければと思います。
来年は、国土館が世田谷に移転して一〇〇年目
になります。国土館が世田谷に移転してきた時に
描いた理想のように、今後も国土館と地域が、と
もに成長・発展していくことを祈念して講演を終
えさせていただきます。